

PRESS RELEASE



宮城大学
MIYAGI UNIVERSITY

報道機関 各位
(教育担当・スポーツ担当)

公立大学法人 宮城大学 大和キャンパス事務局
企画・入試課 広報グループ (担当: 小野寺大作)
宮城県黒川郡大和町学苑 1-1 TEL.022-377-8746

国内最大規模でブラインドサッカーを体験！ 宮城大学, 仲間を思い支え合う新入生交流事業, コンボケーションデーを開催

*コンボケーションデーとは、学生同士のコミュニケーションをテーマとした交流会企画。ブラインドサッカーとは、視覚を閉じた状態でプレーするサッカーで、東京パラリンピック正式種目です。

宮城大学では、2つのキャンパス、異なる3学群に所属する新入生(約450人)が交流するきっかけとして、国内最大級の規模でブラインドサッカーを体験する「コンボケーションデー」を開催します。

本企画は、年2回行われ、春の回では、「他者との交流・他者理解」をテーマとして、ブラインドサッカーの体験を通じて、学生が視覚を失うことの大変さや障がいに向き合う人のすごさを学び、視覚以外のコミュニケーションの大切さを理解するプログラムです。ブラインドサッカーは、声掛けを初めとしたコミュニケーションが鍵となることから、企業の新人研修などで体験会が盛んに行われています。当競技の男子日本代表主将である川村怜選手や、女子日本代表主将である鈴木里佳選手、宮城のクラブチーム「コルジャ仙台」の協力のもと実施いたします。ぜひ取材くださいますようお願いいたします。

【概要】

日程 平成31年4月13日(土) 10時15分～17時00分

場所 宮城大学大和キャンパス(黒川郡大和町学苑1-1)

10:15	開会行事
10:30	午前プログラム ①日本代表選手らによるパネルディスカッション ②大和キャンパス探検ラリー
12:30	昼食休憩
13:30	午後プログラム ①日本代表選手らによる実技披露、 アイマスクとボールを使ったレクリエーション ②アイマスクをしたレクリエーション ③アイマスクと白杖を使った歩行体験 ④①～③の学びに関するグループワーク
16:30	閉会行事(学長挨拶)、探検ラリー表彰式
17:00	終了・解散

*参考資料 平成30年度宮城大学コンボケーションデー(添付)

なお、秋の回《9月19日(木)》は、太白キャンパスを会場として「食」に関するプログラムを実施します。是非、取材くださいますようお願いいたします。



昨年のコンボケーションデーの様子

【本リリースに関するお問い合わせ先】

公立大学法人 宮城大学
事務局学務課 担当者: 阿部
TEL: 022-377-8314 FAX: 022-377-8282



CONVOCATION DAY

SPRING

新入生交流事業

- ▶ 2018.4.14 SAT
- ▶ 大和キャンパス



コンボケーションデイとは

コンボケーションデイは、学生同士のコミュニケーションをテーマとした交流企画です。今年度は、パラスポーツであるブラインドサッカーを通じて、仲間を思いやり支え合うことや、声掛けによるコミュニケーションの重要性を体験するプログラムを実施しました。

テーマ
他者との交流・他者理解

パラリンピック競技のブラインドサッカー。2020年、宮城県は「サッカー開催地」です。

『ブラインドサッカー』は、視覚に障害を持った選手がプレーできるように考案されたサッカーです。音が出るボールを使用し、「フィールドプレイヤー」は全員がアイマスクを着用します。また、アイマスクを着用しない「ゴールキーパー」と「ガイド」が、ピッチ内の情報やゴールの位置などを「声」で選手に伝えます。ボールの音と、仲間どうしの声掛けによるチームプレーが大切な要素となる競技です。

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックで、宮城県はサッカーの開催地になっています。多くの学生がパラリンピックの応援やボランティアに参加し地域を盛り上げるきっかけになると期待します。

2018年度 コンボケーションデイ〈春〉のプログラム内容

A

実技披露とPK

体育館

ブラインドサッカー選手による模範実技を見学したのち、実際にPKでキッカー役とガイド役を交互に行い、声とサッカーの織り成す要素を実際に体験。キッカー役はアイマスクを装着し、転がると音が出るボールとガイド役の声を頼りに、ゴールを狙う難しさを体感しました。



B

ボールを使ったレクリエーション

体育館

アイマスクを着けて、ボールを使った簡単なゲームを行う、視覚以外の感覚を使う体験。チームに分かれ、全員がアイマスクをした状態で、いかに早くボールを渡し終えるかを競います。渡す際にボールを鳴らす・声をかける・距離を縮めるなどの工夫を楽しく行いました。



C

アイマスクを着用したレクリエーション

体育館

全員アイマスクを着けてグループを作る、コミュニケーションを深める企画。血液型や誕生日などのグループを、アイマスクをつけた状態で互いに相手を探しながら、形成していきます。大きな声で呼び合ったり、手探りで確認し合うなどコミュニケーションを深めました。



2018年度 コンボケーションデイ〈春〉の実施概要

仙台を拠点に活動するクラブチーム『コルジャ仙台』をはじめ、全国から集まってくださったブラインドサッカー関係者の方々の全面的なご協力を得て、在学生スタッフ・教職員スタッフが企画・運営を担当し実施しました。

- ◇実施日時/平成30年4月14日(土) 9:30～
 - ◇開催場所/宮城大学大和キャンパス
 - ◇参加新入生390名(看護学群:90名、事業構想学群:188名、食産業学群:112名)
- 6グループ(72～73名程度×6)に分かれ、グループごとに6か所の体験コーナーを回るスタイルで展開。



D

歩行訓練

1・2階渡り廊下

渡り廊下等を使って、白杖を持ったアイマスク着用者と歩行介助役の晴眼者でペアを組み、交互に歩行訓練を行う企画。アイマスク着用者は歩行介助役のガイドで、障害物を避けながら歩行します。視覚以外の感覚で歩く大変さや、相手を思いやるガイドの仕方を学びました。



E₁

座学① ブラインドサッカーについて

2F大講義室

主に視覚障害者と競技の特性について聴講し、理解を深めるレクチャー。日本障がい者サッカー連盟(JIFF)について、また視覚障がい者と晴眼者が協力して行うブラインドサッカーについて学習。パラリンピックでの選手の素晴らしいプレーには感嘆の声があがりました。



E₂

座学② 障害者スポーツとの共生

2F大講義室

選手の職場の経営者をお招きして、障害者と仕事や社会との関わりをどう形成しているか、ケーススタディーを交えコミュニケーションの大切さなどを学習。「放課後等デイサービス」に取り組む、地元企業・仙台中央タクシー『みらい宮城野』の貴重なお話を伺いました。



INTERVIEW

ブラインドサッカー体験を通じて感じたこと

看護学群	<ul style="list-style-type: none">● 右も左もわからなくなり怖かった● アイマスクをして、グループを作るのが楽しかった
事業構想学群	<ul style="list-style-type: none">● 白杖を持ち一人で街を歩いている人は怖いだらうと感じた。困っている時は声をかけたい● ガイドは思いやりが大切だと思う
食産業学群	<ul style="list-style-type: none">● 方向感覚がなくなり、視覚の大切さを知った● ブラインドサッカー体験が面白かった。川村選手のシュートに感動した

キャンパスの垣根を超えた交流

看護学群	<ul style="list-style-type: none">● 初めて会う人とも自然に話ができ楽しかった● 他の学群にも友達ができよかった
事業構想学群	<ul style="list-style-type: none">● チームやペアで、いろんな人と交流できて楽しかった● 今日は声を出していっぱい笑った
食産業学群	<ul style="list-style-type: none">● 大和キャンパスに来るのは入試以来、キレイで広いなと改めて感じた。新鮮で楽しかった● 初めてのことばかりで面白かった。他の学群の人とも話せて嬉しかった

GUEST講話

信頼関係が大切、サポートしてくれる「声」を信じて。

今回、皆さんの声が多かったのは、“動くのが怖かった、難しかった”というものです。晴眼者は、8割程度、視覚の情報を頼りに行動すると言われます。ブラインドサッカーは視覚以外の情報、残りの2割を頼りに動かなくてはならない、そこに怖さや難しさを感じたことでしょう。

最も重要なのは、人の「声」を頼って競技するところです。仲間の「声」を信じて行動することができるか、それはお互いの信頼関係がなければ難しいことです。今回のような視覚を閉じる体験によって、新しく何かに気付く・感じてもらう機会になれば嬉しいですね。2020年のパラリンピックに向けて、またブラインドサッカーに触れる機会があったら、ぜひ参加してください。



ブラインドサッカー 日本代表
高田 敏志 監督

つまずいても、そこから学んで前に進んでほしい。

私は、5歳でぶどう膜炎を発症、徐々に視力が落ち、20歳を過ぎて全盲と診断されました。小学生の頃からサッカーが好きでしたが、中学では視力が原因でサッカー部に入れず断念、本当に悔しかったです。サッカーを諦めきれないまま、中学・高校は陸上部へ。その後、鍼灸師になるため筑波技術大学に進学し、ブラインドサッカーに出会いました。この時、“こんな競技があるんだ!”と衝撃を受け感動したのを今も覚えています。家族や友人など多くの方々の支えや助けがあって選手になった今、私は、“健常者だったらここまで出来ていなかった”と思っています。つまずくことがマイナスなんだろうかと、とも。つまずくことから学びがあります。みなさんも、つまずいても決してあきらめず、全力で前に向かって進んでほしいです。



ブラインドサッカー
日本代表キャプテン
川村 怜 選手